

鈴木 泰教授を送る辞

小林 恭 二

鈴木泰先生は、東京大学を定年退官された後、京都橘大学を経て、専修大学に、平成二十二（二〇一〇）年、文学部日本語学科の教授として御着任になりました。

以来、学内では、文学部人事委員、『専修人文論集』編集委員、専修大学日本語日本文学文化会の『専修国文』編集委員のほか、専修大学人文科学研究所所長もお勤めになられています。

鈴木先生の御専門は古代の日本語文法で、『古代日本語動詞のテンス・アスペクト―源氏物語の分析―』（一九八九年、ひつじ書房）に代表される一連の御研究は、現代の古典日本語文法研究の方向性を決定づけたと言えます。二〇一〇年には、『古代日本語時間表現の形態論的研究』（二〇〇九年、ひつじ書房）で東京大学から博士（文学）の学位を授与されています。

学界では、日本語文法学会会長（二〇〇四～二〇〇七年）、日本語学会会長（二〇〇九～二〇一二年）を歴任され、現在も日本学術会議の連携会員、日本語学会理事をお勤めでいらっしやいます。

このように書くと、たいへん近寄りがたい存在のように聞こえてしまいますが、先生は温厚であり、ときにユーモアにあふれたお人柄から、学生はもとより、教員たちも慕われています。

鈴木先生の御着任と同時に誕生した日本語学科は、先生のお人柄によって、教員、学生ともに和やかな雰囲気が出ました。教室では、高度なことを分かりやすく教授する工夫を続けられ、「現代日本語を古典語に訳す」作業な

どによって、学生の知的好奇心をかき立てる仕組みを導入されました。また、二〇一四年からの科学研究費・基盤研究(C)による「現代語文法形式から同じ意味の古典語文法形式を引く『現古文法対照辞書』の作成」の研究グループに日本語学科の若手教員を参加させるなど、後進の育成にも御配慮くださっています。

御専門は、前述のように、古代日本語文法ですが、日本語学科では、日本語教師養成についても、しばしば先生の何気ない一言に助けられたといえます。先生のアドバイスは、長年の御経験はもちろんのこと、お父上・鈴木忍氏、伯父上・釘本久春氏——ともに現代の日本語教育の基礎固めに生涯を捧げられた——から受け継がれた想いに裏打ちされたものであったと推察いたします。

先生から教えていただきたいことはまだまだ多くあり、専修大学のキャンパスを去られるにあたって惜別の思いは尽きませんが、日本語日本文学文化学会を代表し、感謝の気持ちを込めて送別の辞とさせていただきます。

二〇一五年十一月